

Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo

Al Vi Kara

Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo Kioto-Esperanto-Societo

N-ro 97, aprilo 2009



La supran foton pri sakuraj floroj fotis s-ro Kawagoe, membro de nia societo, sur la digo de la Rivera Parko Yodo en la urbo Yawata (*), la gubernio Kioto. Vojo sur la digo estas 1.4 kilometrojn longa, kie ambaŭflanke staras ĉ. 250 sakuroj. Oni diras ke tiu ĉi digo estas la unua vidinda loko de sakuroj en la suda Kioto, ĉar oni paŝas longdaŭre en kvazaŭa tunelo de sakuroj.

Ĝis antaŭ ĉ. 30 jaroj ĝi estis fama aleo de pinoj, sed pinoj velkis pro fiinsektoj. Tiam ministerio pri konstruado plantis sakurojn en 1978.

*八幡市淀川河川公園背割堤

ENHAVO

Ni vige agadas en Kioto ! (活動報告)

- 京都エスペラント会 2009 年次総会 3 p
3月25日の例会に外国からのお客様 5 p
Eldon-plano de “Al Vi Kara” en 2009 (本誌の発行計画) 5 p

今号のテーマ「なぜエスペラントをやっているのか」 6 p
浪川 光代、山内 利朗、相川 節子、森川 和徳、村上 正彦
川越 幹、田平 正子

フォーク歌手 野田淳子さんのこと(相川 節子) 9 p

ABZ kiel gastigi 連載(1) (田平 正子) 11 p

川野邦造さんからの寄贈図書 14 p

Pri Pentraĵo de Nirvano en Toohukuĵi kun fotoj (KAWAGOE Kan) . . . 15 p

京都エスペラント会・例会

毎週水曜日・午後7時から9時まで、エスペラント会館にて

有志の学習会

毎週月曜日・午前10時30分から12時まで、エスペラント会館にて
子連れ参加も歓迎

有志の研究会

毎週木曜日・午後7時～9時、エスペラント会館にて

有志の土曜日のおしゃべり会

毎週土曜日・午後2時～4時、京阪丹波橋駅西側の喫茶店「リーブル」

エスペラントで聖書を読む会

毎週第一月曜日・午後1時～4時、エスペラント会館にて

(次回は5月4日)

Ni vikle agadas en Kioto !

このコーナーは、京都エスペラント会の月刊の活動情報誌「事務局通信」(川越 幹さん編集)やブログ (http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/) の記事を元に、主な活動を紹介するものです。

京都エスペラント会 2009 年次総会

- ・ 日時：1月18日(日)午後1時～4時
- ・ 場所：エスペラント会館
- ・ 参加者：会員10人(委任15人) お客様 s-ino Mireille Grosjean
相川節子、川越 幹、川野邦造、後藤美和、笹沼一弘、田平正子
出口ゆかり、藤本達生、森川和徳、山本鳩江(あいうえお順)
- ・ 内容

ドキュメンタリービデオ「失くした二つのリンゴ」鑑賞

Prezentadoj 川越 幹(春の七草について) 山本鳩江(小咄)

2008年の活動報告(パソコン使用) 森川和徳

2008年の会計報告 後藤美和

役員改選

会長：笹沼一弘、事務局：川越 幹、会計：後藤美和

広報：光川澄子、川越 幹

KLEG 委員：藤本達生、笹沼一弘、田平正子、川越 幹

会誌編集：(編集長)森川和徳、笹沼一弘、田平正子

2009年の活動計画

展示会：「みやこめっせ」の展示参加、京都府国際センターでの展示参加。

講習会：川村 YAS さんに依頼し、2008年と同様に Cseh-metodo で行う。

春から一日講習会を2～3回開催、会員増とエスペラントの周知

を促す。秋は、京都府国際センターでの展示会にて講習会を併催。

例会運営：毎週必ずエスペラント本の講読を行う。

Al Vi Kara 発行計画

4月・8月・12月の年3回発行する。内容は、活動報告、新入会員の自己紹介、テーマによる投稿、大会等の感想などとする。皆様の投稿をお願いしたい。表紙はカラー印刷とする。(5ページも参照)

Internacia Festivalo について 藤本達生



総会にて 手前の左から、森川、川野、山本
奥の左から、後藤、出口、相川、田平、藤本、笹沼 (撮影) 川越



総会後の懇親会にて
左から、川越、笹沼、森川、田平、藤本、Mireille、山本、相川

3月25日(水)の例会

ハンガリーの S-ro HALÁSZ Tamás (ハラス タマス) が出席されました。



左から、田平、山本、Tamás、相川、森川 (撮影) 川越

Eldon-plano de “Al Vi Kara” en 2009 (本誌の発行計画)

- (1) Ni aperigu 3 numerojn en 2009, same kiel en 2008:
n-ro 97 en aprilo, n-ro 98 en aŭgusto kaj n-ro 99 en decembro.
Vi sciuj ke memorinda n-ro 100 eldoniĝos en 2010.
- (2) Ĉiu numero konsistos el la jenaj artikoloj:
 - a) la agad-raporto nomata “Ni vigle agadas en Kioto!”
 - b) Sinprezento de novaj membroj
 - c) Opinioj pri speciala temo, ekz. “Kial mi estas esperantisto?”
Multaj membroj sendu sian manuskripton pri tiu temo.
 - ĉ) Impresoj pri kongresoj aŭ renkontiĝo ktp.
 - d) Aliaj temoj

今号の特集テーマ

今年の第57回関西大会（高槻市で開催）のテーマより、「なぜエスペラントをやっているのか」について、会員の皆様のご意見やコメントをいただきました。編集部
に到着した順番で記載しています。

関西大会のホームページより

今なぜエスペラント Ni montru, kial ni nun esperantistas.

この大会で私たちは、市民対象のエスペラント講座をはじめ、エスペラント講演
や、世界にエスペラント訳で紹介された地域伝承文化についての講演、その他多彩
なプログラムを通して、エスペラントが生きてはたらく言葉であること、そしてエ
スペラントでなにができるのかを多数参加の楽しい雰囲気の中で大いにアピールし
ましょう。

今年はザメンホフ生誕150周年。それを記念してタニヒロユキ氏にザメンホフ
に関係した内容で講演をしていただきます。

浪川 光代 さん

世界の人々と言葉の隔たりなしに会話、文章のやりとりができるようにするため。

しかしながら「エスペラント」という言葉の存在すら、死語のように扱われ、普及
していないのは残念である。英語偏重型の世の中を覆したい。

山内 利朗 さん

今、エスペラントをやっている理由は、ひとえに「楽しいから」です。

他の国の人たちがエスペラントで書いたブログの長くない記事を読んだり、メール
を交換したりするのが楽しいです。

あれこれの民族語ではなく、わざわざエスペラントで書いてあるのが嬉しい気がし
ます。

相川 節子 さん

エスペラントを始めたきっかけは、学校の図書館にたまたまあったザメンホフの伝
記を読んで、感銘を受けたからです。

でも、いくら伝記に感動しても、エスペラントがむずかしかったら、とても続かなか
ったでしょう。当時高校生でしたが、学校で勉強する英語が苦痛でした。たとえば、

関係代名詞の機能が理解できませんでした。でも、エスペラントの講習会では、関係代名詞がわかったのです。

英語では、不規則動詞だの単語の綴りだのにエネルギーを消耗して、文の構造まで頭が回らなかったのだと、今になって思います。

もしザメンホフが中国語を知っていたら、たとえば月の名前 *januario* や *februaro* を覚えるのがヨーロッパ語使用者以外にはむずかしいと知って、*unua monato*、*dua monato* のような言い方を考え、エスペラントをさらに易しくしてくれただろうにと思うと残念です。

森川 和徳 さん

私にとって、エスペラントの魅力は二つ。創始者ザメンホフと、エスペラントが日本人にとって発音がやさしいこと。

ザメンホフの伝記は美化されている感じはあるが、ザメンホフが尊敬すべき人物であることは間違いない。ザメンホフが創ったエスペラントだからこそ、人工語にもかかわらず、国家のような強力なバックアップがなくても、100年以上も世界各地の多数のボランティアにより世界中で使用されているのだろう。

発音がやさしいことは、書くとおりに話し、話すとおりに書く、いわゆる一音一語の原則です。一方、英語は書くとおりに話されないため、聞いたり話したり大変難しい言葉です。

村上 正彦 さん

私の人生は仕事（受験化学の探求）のほか囲碁の探求と普及、そして高分子の研究です。研究は完成しましたが、囲碁は進行形です。囲碁の世界への普及がEをやる主目的です。多くの人は外国の人との交流がおもな目的のようですが、私の場合は、囲碁の歴史上最も優れたプロ棋士である呉清源の碁を世界にアピールしたいのです。

具体的には、まずEのセンスを身に着けること、つまりEがペラペラになりたいです。なぜかというとき英語のときがそうでしたが、Eに慣れると一目瞭然の文法ミスが多くても、なにを書いているか分かるE文が書けると思うからです。これが今の目標です。

なお、Eは難しいというのが正直な感想です。もちろん、英語よりはるかに論理的で例外が少なく易しいのですが、難しいというのは、実用可能な証拠でしょう。ま、文学的表現が可能なむづかしい数式的な言語というのが正直な感想です。

川越 幹 さん

私のエスペラント歴は、もともと語学に興味があったので、会社を定年退職後の自己啓発の一環として、当時たまたま新聞に掲載されていたエスペラント初級講座の案内を見て、事務局に申し込み、エスペラントの講習を受けたのが発端でした。

当初は、エスペラントで世界の人々と友好の輪を広げるといふ高尚な思想があるとは知りませんでした。そのため私にとっては会話のためではなく、作文の世界でした。

しかし「なぜエスペラントをやっているのか」と言われると、皆様に刺激されつつ、継続は力なりを信じて、淡々と情性も含めて続けているのが現状です。

個人の勉強の一環として語学的にエスペラントに取り組むことは、大変有意義なことと思いますが正直なところ、言葉は覇権主義なので、拗ってたつ国の無い言葉は絶対的に実用的に成りえないと思いつつ、ボケ防止のためと少しはエスペラント運動に対して、自分が出来る範囲で、協力をしているといったところです。現に数十人もいる会員の90%以上は、まったく例会に出席されておられません。私としては、例外を除き毎週例会に出席していることがせめてもの誇りとしています。

田平 正子 さん

中学時代にアメリカ人と文通していたとき、英語ではほとんど手紙が書けず、人が書いた英語の文を盗んで真似ばかりした。その一つが「国際ペンフレンド協会」が出していた雑誌である。しかしどんなに苦労しても自由に表現できないので、文通もやめてしまった。その雑誌には「エスペラントはやさしい」という宣伝が載っていた。

22歳のとき、仕事場の近くの図書館でエスペラントの入門講座が始まったのに参加した。初めの言語的興味が次々と変わっていった。ザメンホフ思想的、運動的、社会的、人権的、言語権的にと。これからもどう変わるかわからない。

エスペラントでしか劣等感も優越感もなく対等に付き合えないことは変わらない。



Visterio (フジ)

フォーク歌手 野田淳子さんのこと

相川 節子

1990年、第38回関西エスペラント大会が京都で行なわれた。その大会の目玉番組のひとつが、フォーク歌手野田淳子さんの歌だった。「大きな歌」をエスペラントで、「よみがえれ大和川」を一部エスペラントで、そして「時を超えて」を日本語で歌っていただいた。

野田さんに出演をお願いしようと思ったのは、竹内義一さんから聞いた話がきっかけだった。

正確な年月は覚えていないのだが、たぶん1987年かその翌年あたりの夏のことである。

大阪で「戦争展」が開かれていた。竹内さんは、その日、たまたま時間が空いたので、戦争展の会場に入った。(会場は通天閣と聞いたように思うが、この記憶もあやふやである)

その会場で、BGMとして流されていた歌を耳にして、竹内さんはおどろいた。知らない女性の声、知らない歌だったが、歌詞の中に「アミーコはともだち、ムズィーコは音楽・・・」というフレーズがあったのだ。エスペラントの単語が歌詞の中に入っている。

竹内さんは、受付にいた人に、何という歌なのか、どなたが歌っているのかとたずねた。そこで、野田淳子さんという名前がわかった。会場に流れているのはライブ録音で、この歌はまだレコードやカセットテープのかたちで販売されていない、ということも。(注：今はアルバムCDに入っている)

そのエピソードを竹内さんから聞いて、我が家で話したら、うちの娘が野田さんのことを知っていた。フォーク歌手で、平和を願う歌や社会的弱者をテーマにした歌をよく歌う方だという。当時すでに知られていた「大きなうた」が、野田さんのレパートリーのひとつで、作者の中島光一さんが野田さんの夫君だということも、娘から聞いた。

この時、竹内さんをおどろかせた歌が「時を超えて」だったのである。作詞作曲も野田さんご自身。「聞いてほしい ひとりの 青年の物語・・・」という歌詞で始まるこの歌は、プロレタリア・エスペラント運動の活動家だった宝木寛さん(たからぎ ゆたか、1917-1943)のことを歌っている。治安維持法違反で投獄され、結核で危篤状態になったための刑執行停止で、自宅に帰って亡くなった。実質的には獄死と言える。

少し時代背景を説明するなら、当時東京にいた中村日出男さん(のちの宇治城陽工

スペラント会会長)が、小林多喜二の葬儀に参列しようとしただけで逮捕され、1ヶ月拘留されたのは1933年。宝木寛さんの兄、武則さんが、横浜港で長谷川テルを見送ったのが1937年のことだった。

その後長い年月がたち、1984年、弟の宝木実さんが、寛さんの生涯を綴った「レジスタンスの青春」という本を出した。野田さんがこの本を読まれたかどうかまでは知らないが、あの暗い時代に、エスペラントを学び、国際交流を実践していた寛さん、拷問を受けても節を曲げなかった寛さんのことを、野田さんは美しいメロディーに乗せて歌ってくださった。

最近、野田さんのファンが、この歌に感動してエスペラントの学習を始め、横浜の世界大会に参加されたというエピソードもある。

前述の関西大会のあとも、わたしが野田さんの歌を聞く機会は何度かあった。コンサートで、野田さんにプレゼントをするファンの列に加わって、エスペラントと日本語で書かれた絵本「La arbo, kiu forkuris...」を手渡したこともある。

野田さんのレパートリーでわたしが好きな歌はいくつもあるが、中でも楽しい作品は、「お母ちゃん きらいや」という歌。小学生の女の子の語りとお母ちゃん役の野田さんの歌が、掛け合いで演じられる。女の子は、チョコレートもジュースも買ってくれないお母ちゃんに不満。でもお母ちゃんは、こどもの健康を真剣に考えて、おやつも食事も安全なものを用意したい。そんな母と子の歌だ。

この歌を聞いたのは、ある女性団体のイベントでだった。その時語りの部分を務めたのは、当日の参加者の中から選ばれた素人の小学生だという。リハーサルは1回だけだったそうだが、何度もいっしょに練習していたかのような、スムーズなかけあいだった。

いつか、この歌をエスペラントに訳して、野田さんと、誰か denaska esperantisto のお子さんとの共演で、エスペラント大会で歌っていただけたらいいな・・・と夢見ている。

* == * == * == * == * == * == * == * == * == * == * == * == * == *

ここに書いた「時を超えて」「よみがえれ大和川」「お母ちゃん きらいや」は、「野田淳子ベストアルバム 1980~1999」に収められています。このCDを試聴したい方は、京都市下京区のエスペラント会館へおいでください。

お買い求めの場合は、京都音楽センター (<http://www.wawawa.ne.jp/>、電話 822-3437) へご注文を。アルバムは2000円で、16曲が入っています。

ABZ kiel gastigi (1)

TAHIRA Masako

(A) Pasporta Servo

Mi estas membro de Pasporta Servo. Kio estas Pasporta Servo? Ĝi estas servo de Esperanto-movado por Esperanto-parolantoj. Ĝiaj membroj havas la eblon ricevi gastadon. Ĉiuj kiuj posedas propran ekzempleron de la libro nomata “Pasporta Servo”, estas membroj kaj rajtas uzi sian libron por trovi gastigĝon. La libro estas eldonata ĉiujare de Tutmonda Esperantista Junulara Organizo (TEJO). Ankaŭ la aĉetintoj de la libro estas membroj. Pri detalo de Pasporta Servo vizitu interretejon: <http://www.tejo.org/eo/ps>



En la listo de la gastigantoj en la libro mi skribas pri miaj kondiĉoj kiel gastiganto: telefonu post la 22a horo (ĉar mi preskaŭ ĉiuvespere malestas hejme pro Esperanto kaj aliaj aferoj); manĝeblas (mal)vegetare (ĉar mi estas fleksebla); vizitu Esperanto-klubojn proksimajn (mia vera celo gastigi esperantistojn estas ne monopoli al mi gastojn, sed interamikigi gastojn kun aliaj esperantistoj); ne petu invitilon por vizo, laboron, monon (ne misuzu la libron!); menciu plenan nomon, ret/loĝ-adresojn, tel/faks-numerojn, aĝon, sekson, (mal)vegetaranecon, por ke mi povu peti gastigon ĉe alia esperantisto, kiam mi ne hejmas. Ŝajnas, ke mi postulas al gastoj tro serioze kompare kun aliaj bonkoraj gastigantoj.

Malgraŭ tio venas gastigpetoj malseriozaj: eĉ sen propra nomo nur kun retadreso, sen sekso kaj aĝo. Fakte al mi mem tute ne gravas kiulandano, kiomjara, ĉu viro aŭ ino, ĉar mi akceptas iun ajn senkondiĉe. Sed kiam mi petas al aliaj akcepti gastojn anstataŭ mi pro mia foresteco, gravas informoj, ĉar iuj senedzaj sinjorinoj gastigas nur inojn, iuj aliaj malakceptas vegetaranojn, fumantojn ktp.

Iuj ne skribas, en kiu libro (ĉu en Pasporta Servo, ĉu en Jarlibro de Universala Esperanto-Asocio = UEA, ĉu en Kongreslibroj) ili trovis mian adreson. Al tiuj sensalutaj homoj mi demandas, “Se vi ne respondos, kie vi ricevis mian adreson, mi ne respondos al vi”. Iuj respondas “En libro mi trovis vian adreson”. Mi redemandas “En kiu libro?”

Ne estante membro oni fotokopias la libron “Pasporta Servo” depruntinte de alia homo.

Kiom da energio kaj mono necesas por kompili kaj eldoni la libron ĉiujare ĉe TEJO ene de UEA! Gastigantoj en la listo rajtas ricevi senpage la libron, sed kiom multe da gastigantoj mem donacas monon al TEJO eldoni kaj sendi ĝin! Gastoj ne nur gustumu bongustaĵon, sed komprenu, kiuj subtenas Esperantujon!

(B) Kiam gastigi?

Japanoj demandas al venontaj gastoj, kiam ili venos, ĉar gravas al tre okupataj japanoj, ĉu tiam ili estos liberaj aŭ ne. Iuj eĉ ne skribas, kiam, esperante, ke iam ajn gastigantoj akceptos gastojn. Mi komprenas, ke foje malfacilas fiksi itineron de la komenco ĝis la fino de la vojaĝo. Sed almenaŭ informu, ĉirkaŭ kiam alveni. Sen informo gastigantoj ne povas respondi jes aŭ ne. Se gastigantoj ne respondas al gastigpeto, gastigpetantoj plendas, ke respondo ne venas. Ne estu mi-isme! Pasporta Servo ne estas senpaga hotelo, nek senpaga manĝejo, nek senpaga ĉiĉerono! Se mi skribas tiel “nek, nek, nek”, stultulo miskomprenas, ke mi postulas monon!

(C) Kie akcepti?

Iuj gastoj esperas, ke gastigantoj venos akcepti ilin en flughaveno, ne sciante kiomcent kilometroj da distanco estas inter mia loĝejo kaj la flughaveno; kiom multe kostas tempe kaj mone veturi ĝis la flughaveno. Tre memstaremaj homoj mem bone informiĝas, kie situas la flughaveno, kie estas la stacio JR-Kioto. Ili demandas min, kiel kaj per kio veturi de la stacidomo por atingi mian loĝejon. Mi informas, de kiu bushaltejo antaŭ la stacidomo, per kiu numero de buso, ĝis kiu bushaltejo, kiom da minutoj, kiom kostas busbileto, kaj atendas ĉe la haltejo proksima de mia loĝejo. Sed ofte mi devas atendi gaston en la stacidomo, se ne en la flughaveno. Mi avertas gaston, ke li/ŝi ne moviĝu de sur la kajo, kien li/ŝia trajno alvenas, ĉar mi serĉos gaston sur la kajo aĉetinte la enirbileton. Gasto tute ne antaŭscias, kiom multe da elirejoj estas en la stacidomo.

Mi rakontos pri tri ekzemploj, kiel mi malsukcesis akcepti gaston.

S-ro X, germano, venos el Nagojo al Kioto. Kompreneble li informis min, per kiu trajno li alvenos al Kioto. En la stacidomo mi aŭdis anoncon, ke okazis akcidento kaj lia trajno ne venos. Mi kredis, ke li venos per la sekvanta trajno. Sed li ne troviĝis en la sekvanta, nek postsekvanta, nek plipostaj ... Mi telefonis al lia gastiginto en Nagojo, kio okazis al li. Sed neniu respondis telefonon. Post horo da atendado sur la kajo mi rezignis kaj hejmeniris. Sur la pordo estis mesaĝo, ke s-ro X atendas min en proksima kafejo. Li aŭdis en la stacidomo Nagojo, ke lia trajno ne veturos pro la akcidento, tial li prenis plifruan trajnon

kaj venis al Kioto. Li kredis, ke li vidos min, se li atendos ĉe en-elirejo malgraŭ mia averto: ne moviĝu de sur la kajo. Li ne sciis, ke ekzistas multaj en-elirejoj. Fine li rezignis trovi min kaj taksie veturis miahejmen. Sed mia loĝejo estis ŝlosita kaj atendis en la kafejo.

S-ro Y, hispano, venos al metrostacio Karasuma en Kioto el Kameoka. Kiel kutime mi telefonis al li, ke mi atendos lin sur la kajo, kien lia trajno alvenos. Sed mi atendis tute vane. Post horo mi rezignis kaj hejmeniris. Mi telefonis al lia gastiginto en Kameoka, kio okazis al li. S-ro Y revenis al Kameoka rezigninte vidi min. Li estis komencanto de Esperanto kaj misaŭdis la vorton “kajo” iom similan al la hispana “kamino” (= strato). Li atendis min sur la tero supre de la metroo kaj mi atendis lin sub la tero! Mi pentis, ke se mi dirus “sub la tero, sed ne sur la tero” anstataŭ “sur la kajo”, li povus kompreni.

S-ro Z, nepalano, venos el Nara al Kioto. Kiel kutime mi telefonis al li, ke mi atendos lin sur la kajo, kien lia trajno alvenos. Sed li ne estis sur la kajo. Mi serĉis kaj serĉis lin, eĉ mikrofone ripete alvokis lin en Esperanto ricevinte specialan permeson mem anonci anstataŭ stacidoma oficisto, “Kara s-ro Z, ĉu vi aŭdas? Tahira Masako atendas vin en la stacidoma oficejo”. Sed vane. Post horo mi hazarde trovis lin en rapidanta homamaso. Mi ĝojkriis. Ankaŭ li. Li forgesis mian averton resti sur la kajo kaj kune kun la ondoj de homoj trapasis tra la biletkontrolejo kaj moviĝante serĉadis min. Por li fervoja stacidomo estas fremda, ĉar en Nepalo ne estas fervojo escepte de internacia trajno kiu iras al Barato.

Lastatempe mi havis ideon atendi gaston antaŭ Kioto-Centra-Poŝtoŝicejo antaŭ la stacidomo Kioto. Ene de la stacidomo estas tro da homoj, kajoj, en-elirejoj, sed la Poŝtoŝicejo estas nur unu. Oni facile trovas la unusolan poŝtoŝicejon antaŭ la stacidomo.

(daŭrigota)

< 要約 >

「客の受入れ A B Z」 (1) 田平正子

(A) Pasporta Servo とは ?

(B) いつ来るのか ?

(C) どこで待つか ?

(続く)

川野邦造さんからの寄贈図書

1月18日の総会(3ページ参照)にて、川野さんから9種類の図書を寄贈していただきました。

	titolo	paĝo	aŭtoro (eldonejo)
	三高エスペラント会小史	76	桑原利秀
	大本えすぺらんと史	95	大本エスペラント友の会
	翻譯實驗室	200	中垣虎児郎
	原爆の子	306	岩波書店
	Infanoj de l' atombombo	70	Japana Esperanta Librokooperativo
	Aŭskultu la voĉojn de Oceano!	53	KLEG
	El Ĉinio Batalanta	100	緑川英子(長谷川テル)
	Vivo de Zamenhof	133	Edmond Privat
	Historio de la lingvo Esperanto	200	Edmond Privat



Pri Pentraĵo de Nirvano en Toohukuĵi kun fotoj

KAWAGOE Kan

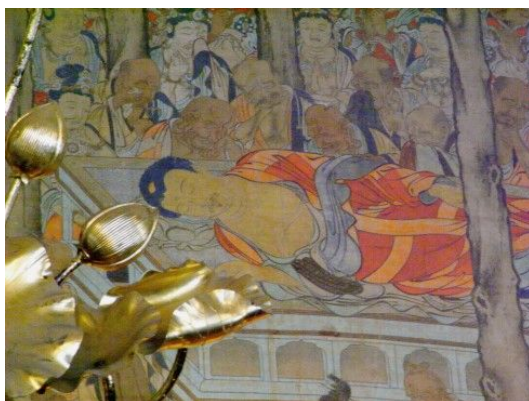
Antaŭ kelkaj tagoj, mi iris al la templo Toohukuĵi por vidi la pentraĵon de Nirvano (涅槃図). Tiam la speciala malfermo de la pentraĵo estis okazigita en la 15a tago, la mortotago de Ŝakjamunio.



Ĉi tiu pentraĵo estas supozeble verko de pentristo Meiĉoo (明兆) en periodo “Muromaĉi”. La grandeco estas 12 metroj en alteco kaj 6 metroj en larĝeco.



Interesis min ke kato estis pentrita sur la pentraĵo. Aliaj pentraĵoj de Nirvano ne havas figuron de kato.



Oni diras ke pentraĵo de Nirvano estis montranta la staton pri la morto de Ŝakjamunio. En la centro de la pentraĵo, Ŝakjamunio mortinta kuŝis ĉirkaŭite de liaj disĉiploj kaj animaloj, kiuj bedaŭris lian morton.

Aliflanke, “Unrju-zu” estis pentrita de Doomoto Inŝoo (堂本印象) sub la plafono de la ĉefpagodo.

En tiu tago mi ricevis strangan emocion kaj retrorigardinte revenis hejmen.

La Redaktoro babilas ...

今号では2つのことを行いました。

一つ目は、特集テーマ「なぜエスペラントをやっているのか」。3月末に本会会員に案内を出し、できるだけ多くの方々に原稿を書いていただくという取り組みです。6～8ページをご覧ください。

二つ目は、本誌の外側となる1・2・15・16ページをカラー印刷とし、表紙は桜の開花の写真で飾りました。

昨年発行の94～96号でもカラー写真を多数載せていましたが、白黒印刷のため、あまりアピールできませんでした。カラー印刷の費用は白黒の何倍もしますが、総会(3ページ)でお許しを得て、今号でカラー印刷を実施したしいです。

次号は8月発行です。皆様方からの原稿をお待ちしております。(森川)



Sakuraj floroj dancas super la tegmento de la templo Jamazaki Ŝooten (山崎聖天) en la urbo Oojamazaki, la gubernio Kioto. Fotis s-ro Kawagoe.

Al Vi Kara N-ro 97, eldonita en la 22a de aprilo, 2009

京都エスペラント会 Kioto-Esperanto-Societo

事務局

〒600-8455 京都市下京区西洞院五条上る八幡町 537-6 エスペラント会館

電話・FAX : 075-958-2475 (川越 幹)

ブログ : http://d.hatena.ne.jp/esperanto_kioto/

電子メール : esperanto_kioto@yahoo.co.jp

会費 : 正会員 年7,200円 準会員 年3,600円

Al Vi Kara 購読費 年1,000円

ゆうちょ銀行(郵便)振替口座 : 01000-4-9895 口座名 : 京都エスペラント会

Al Vi Kara 編集局

連絡先 : 〒618-0071 京都府乙訓郡大山崎町尻江 13-8 森川和徳

電子メール : kz_morikawa@yahoo.co.jp

ファックス : 075-955-1627

Al Vi Kara PDF ファイル版 (94～96号) の保管場所

<http://cid-843fe5eeb586235d.skydrive.live.com/summary.aspx>